

出会う顔

一本歌也

靴のセンターを出会う顔

一寸この頃 元気がない

きびしい冬が眼の前に

来るといふ入に 仕事なし

交すことばは 、「どこい、てるぬん」

、「ど、かだい？」

ケタオ子飯場で追い廻す山

昨夜トニコの ダ干公よ

ノーチアアき 元気がなく

思わす俺は ポケットに 右手をつ、ニミ

バラ銭をつかんでみれば

白 赤 ハフ——

二れでめしるも合、こき口

ダ干公の顔がほころんで

これだけあれば ヤンカラで

ダニゴ汗か かやくメシ 喰べて仕事さかすから

今度はじょくりに満期して 帰って来たら

づぼらやる て、ちり食おうやと

ダ干公一寸の前に

便達二人は目にあひす 資本家のブタ共を

いつか この手で この味を

必ず 清掃 片付けてやろう

川かった 川かった 川かったよ

僕たち 労働者人民が主人公の顔

ゆしと 今その氣にな、てると

ダ干公の その眼の輝きは

セニターの 中をうろろするデカよりと

彼等と 輝きあるを 僕は見た

ダ干公よ 僕らの世をせぬ甲が

変えられぬくとも いつか必ず

おいたちの 社会を乗る事を

皆の仲間と信じてよ